

公開フォーラム『国際協力NGOの体質強化を話し合う』に参加して

森田奈美（事務局非常勤スタッフ）

去る3月15日、NGO活動センター主催のフォーラムに参加し、日本のNGOの実態や問題点を話し合う機会に恵まれました。パネリスト3人が問題提起をしたのち、参加者がその3つのうちで興味ある分野に分かれて話し合いを持ち、最後にそこで話された内容を他グループの人へ発表し、この先につなげていくための意見交換などしました。私は廣野良吉さんのグループに入り、他のNGOで働いている人や、NGOと仕事をしていこうと思っている経営者の人などと話し合いました。

廣野さんはまず①なぜ今NGOが重要になってきたか②NGOに対する期待・見直し③NGOの財政・体質強化とビジョンの明確化、専門性などについて問題提起されました。HANDSのような全てがボランティアでやっている小さなグループからの参加者はほとんどなく、NGOでの労働条件の悪さや、他のNGOとのネットワークづくりの大変さなど、私たちの状況と比べたらかなりいいと思われる人でもやはり苦しみ悩んでいるのを聞いて、日本の社会システムのキツさをしみじみ感じさせられました。結局、問題のかなりの部分は「お金」で解決できる事なのです。きちんと財政的な面を見据えて活動していかないと「誰かの犠牲の上で成り立つNGO活動の意味とは？」という突き付けをずっと背負ったまま、のびのびと十分な活動が出来なくなります。ファインドレイジング（財政確保）専門に一人雇ってでも、この問題は早期に解決されなければならない、という意見が圧倒的でした。この先長く活動していくNGOの財政的困難を転換させていかななくては安定したい活動は出来ない、ということです。（現在、NGOで働く5000人のうち1500人が有給ということでしたが、安定した生活が出来ず3～4年で離れていくことが多いとのこと）。

また、他グループから、政府や財団への報告が目に見えるものの結果しか評価しないということや、カウンターパートとの関係性、NGO組織内の民主化など様々な分野での話し合いが行われました。外国の例などでは、NGOで活躍している人が、どんどん政府機関などへ進出しているというような羨ましい話もありましたが、数時間の話し合いだけでは日本の現状はかなり厳しい、というのが再確認されただけという気がしたのも事実です。この先、企業や政府などにうまくアプローチしてNGOが活きる、NGOで生きられる世の中が変わっていくよう自分の出来ることを積極的にやっっていこうということですが、日々の生活に必死な人が多い中で、どれだけたくさんの人に広げることができるか、またそれとともに世間の感覚が変わっていくのか、問題は山積みです。

父母の協力、HANDSの支援に感謝

ーラムブソンは、学校もCOOPも、実り多い1年でしたー

マリオ・マガリン（ラムアフス分校教師）

3月24日の訪問はとても短くて忙しかったようですね。ラムブソン（学校名はラムアフス）の卒業式にも参加して下さるとばかり思って、みんなでお待ちしていたのに来ていただけなくてとてもがっかりしました。しかし、ハイスクール奨学生のホセ（ラムブソン出身）や、教師仲間を通じて、プロジェクトの報告作成や住民の組織化に関する私の仕事を大変評価しているとの山崎さんのメッセージを聞いた時は、本当に嬉しく思いました。ラムブソンのプロジェクト管理については、これからもどうか私たちに任せて下さい。

今ここに12名の分校卒業生の写真があります。HANDS奨学金支援で学業を終えた子どもたちの写真です。校舎と両脇の二つの雨水タンク建設（FIDR助成）、特に雨水タンクは、子どもたちだけでなく高台に住む住民にとってもすばらしい贈り物でした。そして、これらがすべて父母や住民たちのボランティア労働やバヤニハン（隣組共同作業方式）によって実現したことを誇りに思っています。

（4月15日に、DHLで届いた教師たちの当会事業に対するコメントの一部です）